2023年5月1日

セミナー通信

Ｖｏｌ．335

西村セミナールーム
主宰　西村　恵子

謙虚さ

2022年度卒塾生より

「社会が・・できませんでした・・。」絞り出すような声。点数を聞くと、「・・・１４点です。」――私も一瞬言葉を失った。急に出題パターンの変わった社会、それにやられてしまった・・・。

入試当日。自己採点をして私に報告をしてくれたときのことである。２２点満点のテストで、T ちゃんは練習でもこんな点数は取ったことはない。一度たりともない。旭丘を第一志望としている彼女はほぼ満点を目指さなくてはならなかった。マークシートに変わった初年度であったためボーダーは読めなかったが、５教科１１０点満点中１０４点以上を練習でも目指させていて、それに彼女は応えていたのだ。社会は３時間目である。１時間目の国語と２時間目の数学は、どちらも２１点取れたと言った。テストを受けているときには点数こそ分からないが、“できた、出来なかった”の手応えは感じるものだ。３時間目で出来なさにショックを受けて、その後の理科と英語はどうなったのだろう。今までそこから崩れた子は何人もいる。恐る恐る尋ねてみると、「理科は２２点、英語も２２点でした。」―満点だ！「よくそこでくじけず踏ん張ったねえ！」思わず出た私の言葉に、「はい。」と応える彼女の声は、まだ小さな涙声だった。

中１の初めから入塾した T ちゃんは、塾の宿題、確認テスト勉強、授業内容の復習、この３点において絶大なる信頼感があった。間違い直しをためたこともない。パートテストは３年間で合計１１０枚あったが、中３の受験勉強さなかの１１月に９８点を１枚取っただけで残りは全て１００点だった。中１の初めから受験直前までは一文字たりとも間違えていない。学校の中３第２回定期テストでは５教科合計４９４点という点数もたたき出した。「T ちゃんは賢いから。」誰もがそう思って、T ちゃんがきちんとできてくることを当たり前のように思っていた。

だが、当たり前ではなかったのである。卒塾の際、私にくれた手紙に彼女は書いてくれていた。「私は理解力がありませんでした。塾から帰って何回も問題を解き直して、やっと他の塾生と同じくらいの理解度でした。みんなの何倍も努力しなければ、みんなと同じスタートラインに立つことさえできない私でした。」―彼女が明かしてくれた心の声と、３年間の歩みである。

彼女が他の塾生より理解力がなかったということは決してない。謙虚に自分を見つめ、誠実に勉強に向き合っただけである。「学校の先生に気に入られなくともテストで点数を取っておけば必要内申は取れる。」そんなポリシーも胸の中に秘めていた。そして何でも努力で乗り越えた。社会の失敗をカバーするだけの底力と精神力を、その謙虚さと誠実さ故に身に付けたのだ。

内申４４当日点１００で旭丘合格。T ちゃんが自分を見失うことは今後も決してないだろう。